

第Ⅶ章 まとめにかえて

総社市教育委員会による「鬼ノ城」の発掘調査は、平成6年度から着手された。筆者が発掘調査の現場を担当するようになったのは、平成8年度の角楼・西門跡からである。以後南門跡の調査を経て今回の北門跡ほかの調査に至っている。いずれの遺構も残存状況はきわめて良好で、規模構造の把握が十分に行えるものであり、また日本の古代山城として初の検出事例となるものもいくつかあった。それらについてはこれまでに簡略ながら概報として報告⁽¹⁾してきたとおりである。

しかしそれらの中には筆者の認識不足による誤認や表記について相応しくないものが多々あったことは否めない。ここではこれまでの調査成果を箇条書的にまとめ、いくつかについては訂正をしておきたい。

第1節 各種施設

(1) 城塁

城塁は頂部平坦面から斜面となる傾斜変換点付近に構築されており、斜面を走り尾根を横切り谷をわたって全周2.8kmにわたって鉢巻状に巡っている。城壁は平均的には下底幅約7m、上面幅約6m、高さ約6mであるが、構築場所によっては地形に起因し、これらの数値は当然のことながら多少異なってくる。なお城門部では上屋の問題もあり、上面幅が10m前後になっている。

- ・城塁は直線を基調として「折」をもち、短い区間で3.5m、長い区間では68.5mにも達するものがある。この長短の差は地形に起因していることは言うまでもない。
- ・城塁は版築土塁を主体とし、要所となる正面側の6か所には高石垣を築いている。
- ・版築土塁と高石垣は、各区間の長さの合計で比較すると、全周2.8kmのうち版築土塁が90%を占め、高石垣は10%となる（水門部の石垣を除く）。

ただしこの数値は城壁の不明確な区間をも版築土塁とみていたもので、それらの区間の一部には自然地形をそのまま利用したり、一部を人為的に加工しているものが今回の調査で判明しているから、確実に版築土塁を構築していた区間の割合は多少減じて考えなければならない。それらの区間は主として東門から反時計回りの背面側の区間で、血吸川上流の峻険なV字谷地形のところ為主であり、その他にも主として背面側の小さな谷地形のところにも不明な区間もある。しかしそうしたことを勘案しても、鬼ノ城が石築部（高石垣）を含みつつも、基本的には土城であることに変わりはない。

- ・城塁は城内壁となる内側列石をもつから、基本的には内外に面をもった夾築構造といえるが、傾斜変換点付近に構築されているため、推定される城内壁は20～50?cmと低く、内托構造に近いような形状である（城内壁がある程度の高さをもっているのは水門部であり、高いところで第2水門の3mがある）。

<版築土塁>

- ・城壁は傾斜変換点付近に構築されているため、城壁の基部となる外側列石を地山を無加工のまま設置することは、その上部にのる版築土塁や高石垣の荷重を考えると不安定であり、地山の一部を削平整形して安定面を確保することは当然必要である。また城壁上部の荷重のみでなく、城壁が地形により次区間へ下降傾斜する区間も多々あり、その場合上部からの荷重のみでなく、下降傾斜した

城壁全体の大きな荷重により倍加することも考えられる。

- ・城壁を構築する基盤面は、基盤の安定と版築土の融合接着のため、表土層や堆積土を除去して地山面上から構築する。
- ・版築土塁は外側基部に1段1列に列石（外側列石）を据えて基礎とし、その上部は版築で積み上げる。列石に用いられた石材は花崗岩とアプライトであり、数的には前者が多い。
- ・基礎となる列石を据えるところが平坦でない場合は、先述したようにL字状に削平して平坦部を作り出している。その範囲は場所にもよるが1～2mにおよぶ所もある。列石の裏面には裏込め石はなく、版築で固定しているのが一般的である（第62図の箇所は例外的なものにちかい）。
- ・版築土塁を上、中、下層に大別してみると、下層は各单位層が薄くよく締まっているが、中層では各单位層がやや厚みを増して硬度が僅かに弱くなり、さらに上層ではかなり大きな礫を含む厚層となり、軟質になる傾向がある。流失してしまっていて確認できないが、最上層に雨水などの浸透を防ぐ硬度の高い層か、それに類する措置が施されていた可能性が考えられる。
- ・調査を実施した単位区間内でみるかぎり、朝鮮半島の山城で指摘されているような横位の作業区間を識別できるような痕跡は認められず、平行的に長い単位層として検出されている。同一単位層内で版築作業を中断したり、長い時間を費やすことは原料土の乾燥をまねき不合理であるから、版築作業にあたって一時的にせよ、多量の労働力を投入した可能性が高いように思われる。

因に平成14年度に実施した版築土塁の復元整備工事においては、版築で突き固めるだけの作業に要した実績でいえば、1日1人が0.25～0.3m⁽³⁾とのことである。投入労働量や習熟度、あるいは土質、関連作業などの問題があるにせよ、単純計算すれば城壁全体の版築土塁の突き固め作業だけで延べ17万人近い労力を要することになる。

- ・原料土は花崗岩とアプライトの風化土である。とくにアプライトの風化土は粒子が細かく、突き固めに適している。これらの原料土は城域一帯に分布しており、数量的な問題が残るものの地質からみて現地とその周辺部からの調達が可能と考えられる。
- ・既報告（総社市埋蔵文化財調査年報9）では、版築作業にあたっては、列石前面に柱を立てそれで堰板を固定し、内側列石に添うような位置にある土塁中の柱を支持柱として前面の柱を結束したものと推定していたが、土塁中の柱の底面のレベルは列石上面の250～280cm上位にあるから、版築がかなり積み上がった段階でないと機能できないことになる。このことを誤認していたので訂正しておきたい。したがって、ある段階までは列石前面の柱の支持固定は別の方法で行われたことになろう。
- ・版築土塁の立ち上がり角度は、調査トレンチでみるかぎり残存のよいところでは、列石上1mほどはほぼ垂直に近い。ただこうしたことがすべての区間でいえるかどうかは不明である。版築土塁の外面が流失していて天端まで残存しているものがないので不明である。しかし隣接する高石垣勾配と大きく変わるとは思えないから、ある高さから内傾してそれに近似したものになるとも考えられ、また列石上面から同一勾配で立ち上がるものもあると考えられる。
- ・列石は転石のままか、加工しているとしてもせいぜい粗割り程度である。多少のハツリはあるとしても、基本的にはそれ以上の加工を施したものはこれまでのところ筆者には確認できないし、また粗割りの矢穴らしきものも認められないと考えている。
- ・場所によっては列石がなく、露岩をそのまま利用したり、地山上に直接積み上げているところも多くはないが存在する。

- ・版築は原則として列石の上面から積み上げている。したがって、列石の立面は基本的には「露出」した状態である。しかし部分的だが、版築が列石の立面を覆い隠しているところも僅かだがある。ただ一区間全体の列石が被覆されているところはなく、あくまでも部分的なものである。
- ・版築土塁の外側が天端まで残っているところはない。このため版築土塁の本来の高さは不明である。ただ土塁上面が一部でも原状を保っていれば、復元的に高さは求められるが、その場合も土塁上面が外側に傾斜しているのか、内側に傾斜しているのかという問題もある。このことは城堡天端の流水がどう流れ、どう処理されているのかという問題と関連するが、これを解決できる区間はない。

<高石垣>

- ・高石垣は6か所にある。いずれも正面側で背面側にはない。
- ・高石垣は地山上から積み上げたものもあれば、露岩を巧みに利用してその上に僅かに積み上げたものもある。石垣の前面は殆んどが急崖や急斜面となっているところに構築されている。
- ・石材は花崗岩が主体で、アプライトを補助的に使っている。石材は転石のままか、粗割り程度のもを使用しており、丁寧に加工調整した石材はみあたらない。
- ・石垣の高さが判るのは西門のすぐ東にあり、現存する天端までの高さは6mである。ただしこの高さが旧高を示しているのか、もっと高かったかについては判断できない。他の石垣は基部を掘り下げるのは遺構の保護上問題もあり未調査だが、屏風折れの石垣区間では一部ながら4.5~5.4mの高さを確認しているから、多少の高低はあるようである（この区間では上端面は水平に近い状況であるから、地山の高低に起因しているのであろう）。
- ・石材の積み方は野面積み、重箱積み、整層積みなど多様である。石積みも直線を基調としており、屈折部では算木積みのものも見られる。
- ・高石垣は多くは一面的だが、石垣全体の平面形が舌状を呈する屏風折れの区間や突出部を構成する区間もあり、これも地形に起因する。
- ・高石垣のほかに低石垣ともいべき高さ1m前後の石垣部分もある。所在地は高石垣の近くや第1水門に隣接したところである。
- ・高石垣の勾配は、西門近くの石垣では15度ほど内傾している。他の石垣もほぼ同程度の勾配である。
- ・高石垣は全体的に残存状況もよく、いまでも威圧感がありまた視覚的效果を高めているが、それはあくまでもある程度の距離内から、つまり高石垣として視認できる距離からのことであり、遠くからでも威圧感を与えるのはむしろベルト状をなす城壁全体から受けるイメージであろうか。
- ・一部を解体積み直しを行った西門近くの高石垣の状況から、以下のことが観察される。

この石垣は縦、横によく目地のとおった重箱積みの石垣として知られたところである。この石垣では控えの長い石材の使用が目立ち、裏込石は大型のものが多く、石垣材と同大かそれ以上のものもある。掘り方の側には板状の大型材を土止めや裏込めの安定を兼ねて使用している所もあり、また裏込めの最上部のものは城内側へやや下がったように充填している。石積みは小口積みを多用しているから、全体としての形状が重箱積みになっている。

- ・裏込めについては、既報告では未調査のためあまり多くを用いていないとしていたが、今回の解体積み直しをみると誤認であり、訂正しておきたい。
- ・水門部の石積みが整層積みかそれに近い整然とした強固なものに対し、高石垣の石積みの中にはややラフな印象を受けるものもある。

一般に朝鮮式山城とされるものでも、水門部を除けば高石垣（石塁）をもつのは大野城、金田城しかなく、鬼ノ城は神籠石系山城では異色な存在といえよう。

版築土塁と高石垣で構成される城塁の天端はどのような傾斜になっていたのだろうか。

城内壁となる内側列石は比較的良好に残存しているが、外面壁となる版築土塁の前面が上部まで残存しているところは皆無である。一方、高石垣は現存する最上部が築城時のままか、一部が欠落しているのかという懸念はあるものの、土塁に比べると比較的良好に残存している。そうしたことを踏まえつつ、内側列石天端から残存高石垣の天端を結んでみると、城壁天端幅6.1mに対し20cmほど前面が下降している。この数値は西門のすぐ東の高石垣のものであり、南門の手前の第19塁状区間の高石垣では天端幅5.6mに対し26cm前面に下降していて、同じような傾向を見せている。ただしこの数値は内側列石と高石垣の最上部に版築などの上層のものがないと仮定しての数値である。とするならば、城壁天端の流水などはすべてではないにしても、城壁の前面側へ流下することになる。高石垣はまだしも、版築土塁にとってはあまり好ましい状況とはいえない。因に城内側敷石は基本的には城内側へ下降して敷設している。このあたりに城壁上面がどのようなになっていたかを考えるヒントがあるのかもしれない。

また、城壁上面は5～6mという幅広さであり、地形によっては次区間へ向けて下降傾斜しているところもある。当然雨水の流路となるところであり、版築土のままなのか、不透水層としてのなんらかの対応措置が施してあったのか、という問題もある。それを裏付けるかのように高石垣区間の城壁上面には敷石状の石材が散見できるところもある。それが全体的なものうち残存している一部なのか、もともと部分的なものなのか、今後の課題である。

<列石前面の柱穴列>

外側列石の前面から柱穴列が検出された。しかし鬼ノ城では列石の前面に敷石が敷設されているので、敷石の欠落した部分からの検出である。このような柱穴列はすでにおつぼ山城、帯隈山城、御所ヶ谷城、鹿毛馬城、女山城、石城山城などの神籠石系山城で確認されている。

- ・検出された柱穴は径15～20cm、深さ30～60cmで、ややばらつきがある。柱穴の掘り込みは概して垂直状のものが多い。
- ・柱穴は列石にほとんどくっつくように掘られており、列石との間に空隙部をもつものもないではないが少ない。
- ・空隙部と列石の間に帯隈山城例などのような添石⁽⁴⁾があったかどうかについては、のちに敷石が敷設されるため不明である。
- ・柱穴の間隔は290～301cmであるが、平均的にはほぼ300cmに近いものが多い。また城壁は直線を基調として折を構成しているが、折れ部分には必ず柱穴が存在する。
- ・前面の柱穴と土塁中の柱穴が検出されているものについては、位置的にはほぼ対応しているから、あるいはこうした関係が他の部分でもみられる可能性がたかきように考えられる。
- ・柱穴は抜き取り穴はないが、その後に敷石が全面的に敷設されているから、永定柱として工事後も残る事はない。したがって、この柱は工事に伴って必要なものであり、その位置や間隔などからみて版築構築時の堰板を固定するために要したものと考えられる。

余談だが、今回の版築土塁復元工事では1.5m間隔で柱を立てていた。

<土塁中の柱穴列>

- ・城壁の内壁となる内側列石に、ほとんど添うような位置の城壁上面で柱穴列が検出された。
- ・柱径が判るほどまで掘り下げたものは数本だが30～40cmの太さであり、列石前面の柱径に比べると太い傾向がある。なお抜き取り穴はなく、版築工事終了後も存在したことになる。土壘天端からの柱の根入りは図上復元的には2.0～2.5mにもなる。
- ・これらの柱は、版築土壘が外側列石からおよそ250～280cmほど積み上がったところで掘り込んで据えられている。かつてこの柱を版築構築時に列石前面の柱を引っ張り固定するアンカー柱として考えていたが、版築初期段階ではこの柱はないため、こうした考えはできないことは前述した。ただ後半段階になるとそうした役割を果たすことも可能になろう。ただし柱を立て後方へしっかり引っ張ることができれば不可能ではないということである。
- ・この柱列は板塀または柵列の柱と考えられる。ただ設置されている位置からみると、どこかに開閉的な措置が施されていたのではないだろうか。もしそうでなければ、この柱穴列より前面の城壁上面に出られず城壁下は死角になり、折角の高い城壁も意味をなさないことになる。
- ・このような柱穴列の類例は大野城大宰府口城門⁽⁶⁾近くで検出されているが、位置が土壘頂部で内外二列あり、柱径は20cm前後と小さく、柱間も1～2mとばらつきがあり、鬼ノ城例とは柱穴の位置、柱径の大きさ、柱間の斉一性など多少異なっている。

これまで鬼ノ城の土壘については慣用語として、版築土壘として報告してきた。しかしそれがいかなる要件、工法のもとで実施されたものかについては、いまだ不明のことが多い。またその実態もかなり複雑なようであり、各人各説の観なきにしもあらずのようでもある。

版築について『広辞苑』では「土壁や土壇の築造法で、板でわくを作り、土をその中に盛り、一層ずつ杵でつき固めるもの。古く中国の竜山文化に始まり（後略）」としている。

韓国の版築土壘について車 勇 杰氏は「版築法は城壁を築造するに際し、木柱と縦横の長木材及び繩索等で一定の区間に外範を作った後、その内部を土により層をなすよう水平に積み上げたものを言う。」⁽⁷⁾とされている。

また西川 宏氏は「本来版築とは板と板との間に土を詰めてつき固める工法であり、板で区切るという方法をとらないつき固めの工法は、中国では夯土とよんでいる。」⁽⁸⁾としている。

いわば一種の型杵工法であり、その内部に土を入れ杵でつき固める作業の反復と言うことになる。これらを目安として、鬼ノ城の土壘を今一度検討しておきたい。

鬼ノ城では外側列石（神籠石状列石）に接するような位置で、ほぼ3m間隔で柱穴列が検出されている。柱が立っていたであろうことは容易に推定されるが、工事後柱は撤去され、前面造成（列石据え置き時に造成か）ののち敷石が敷設されている。こうしたことからこの柱は、城壁完工後には存在せず（永定柱にはならない）、工事中に必要だったことになる。この柱は列石との位置や柱径、深さなどから杵となる板（ないしは板状のもの）を支持、固定したものであると思われる。これに対し背面側（城内側）は地山が傾斜し、完工後の城壁も低く内托といってもいいほどの形状のものであるから、杵（板）は不要となる。

以上は城壁の長軸側の対応であり、短軸側をどのように対応していたのかは、これまでの調査では不明である。外側の柱はほぼ3m間隔で並んでいるが、これのみで板を支持、固定することはできず、この柱列を縦横材等で結束し、さらには背面側への固定や前面では突っ支い棒的な補助材も必要だっ

たと思われる。鬼ノ城の外側列石の立面は基本的には露出しているが、一部には被覆している部分もある。それらはいくまでも単位区間の一部でみられることであり、区間全体に及んでおらず、また被覆度（幅）も小さいことから、ことによると堰板の固定などが不十分だった結果を反映しているのかもしれない。

枠内の土は、外側列石の天端が水平をなすところでは水平な層序となり、天端が傾斜をなすところではその傾斜に平行する層序となっている。土質は異質土の互層状になるところもないではないが、基本的には真砂土なら真砂土、アプライトの風化土ならアプライトの風化土で積み上げている。鬼城山とその一帯に産出する土壌であり、量の多寡の問題もあり、土取場等も確定できていないが、現地調達であろう。各単位層は堅くよく締まっており、とくに下層はスコップで掘り下げることは困難な堅さであり、唐鍬かツルハシが必要である。

こうした鬼ノ城の土塁の状況をみると、版築法の最低必要条件は具備しており、それが版築土塁とよぶことが可能だと理解できる。

こうした版築工法による土塁の築造は、いかに内托状構造の土塁とはいえ、6 m近い高さに積み上げるのは大変な工事量であり、先の簡略な試算においても膨大な労働力を要したことがうかがわれ、稼働労働力からみても築城が短期間ではできないことを暗示しているようである。

このような列石前面の柱穴列は、神籠石系の古代山城では前述したごとく女山・帯隈山・おつぼ山・鹿毛馬城⁽⁹⁾でも検出されており、柱間は3 m前後で鬼ノ城例と合致するが、石城山城⁽¹⁰⁾では2 m強前後でやや短いようである。

韓国における土城では、車勇杰氏によると百濟時期築造の木柱間隔は1～2 mの短い間隔で立てられているが、統一新羅時期では2 m以上、4 mに達するような間隔が広がる現象が指摘されており、また土塁基底部の列石の有無もほぼ同時期に考えられている⁽¹¹⁾。

成正鏞氏は鬼ノ城について「版築と（長）方形石材を高く積み上げる外部石築（高垣）と敷石、自然通水式の排水、石築前面の柱穴など多くの要素について、やはり百濟泗泚期の扶蘇山城や羅城などにその起源を見いだすことができる。ただ、純粋な土築のための基礎としての基壇列石（神籠石）の起源が百濟にあるのかは確実ではない。神籠石が日本で発達し、その後新羅において純粋土築の基礎として利用された可能性は排除しない⁽¹²⁾。」とされている。

さきの列石前面の柱穴列をもつ神籠石系山城では、工事後も柱が抜き取られた形跡がなく、おつぼ山城や鹿毛馬城では板材や炭化材が検出されており⁽¹³⁾、堰板支柱として使用後、土塁前縁に女牆を設けるための「女牆支持説」が注目されている⁽¹⁴⁾、という意見もある。ただこれらの諸城は城壁の高さも2～4 mほどであり、鬼ノ城の6 m近いものとは多少異なることも関係しているかもしれない。

鬼ノ城の城壁の一部を構成している高石垣については、西門近くのものしか調査しておらず、それについては別項で報告しているので重複を避けるが、前面は敷石が完存しているので未調査だが、この部分には柱穴はないのであろうか。石垣構築にあたっては足場は必要であり、足場材を埋め込む必要があったかどうかはともかく、機会があればそうしたことも検討してみたい。

（2）水門

城壁が破損する最大の要因は、人的なものや小動物による穿孔などを除けば、雨水等による水であることはいくまでもない。特に土城にあっては尚更のことであり、城壁が谷部をわたるところでは排



第153図版 実験版築の経年変化

1. 作成時（平成11年3月）
2. 平成12年
3. 平成13年
4. 平成14年12月
5. 平成15年3月

水施設として水門が構築されている。

- ・鬼ノ城では水門は六か所に構築されており、その所在位置はすべてが平野を望む正面側であり、背面側には水門はない。
- ・その理由は、城地となっている頂部平坦面の分水界が背面側の近くにあり、しかも頂部が背面側から正面側へむけて下降していることに起因していて、流水の殆どが正面側に流れるからである。
- ・水門の構造は、外側下部の1.5～4 mほどを石垣積みとし、その上部は版築土塁とする。城内側となる内側壁面は、城壁が頂部平坦面から斜面となる傾斜変換点あたりに構築されているため、壁面の高さは低いが石垣積みである。通常の流水量は少ないが、不時の豪雨等を想定しているのであろう。鬼ノ城の水門はこのような構造であり、他城のいくつかのように水門全体が石垣積みのものはない。
- ・水門の石材は花崗岩を主体とし、その形状は長方形材を多用している。転石のままか、多少の粗割り程度であるが矢穴等は確認できない。横目地のよく通る整層積みであるが、縦目地もまた目立つ。高さが低いこともあるのかもしれないが、概して高石垣に比べ積み方も丁寧で堅固な印象をうける。



第165図 城内の分水界

- ・六か所の水門のうち、自然通水のもの二か所（第0・1水門）、排水溝をもつもの四か所（第2～5水門）である。排水溝は石垣の天端上（第2～4水門）か直下（第5水門）に設けられており、高い位置に排水溝があるのが鬼ノ城の水門の特徴とされている。排水溝をもたない二か所の水門は背後の谷部が小さく、流量が少ないからと考えられる。

一般に北部九州の古代山城では、排水溝は石垣の最下部に設定されているものが多い。例外的なものとして、御所ヶ谷城の中門では地上から1mほどのところに排水溝がある。

- ・水門の外側前面の調査は二か所（第0・1水門）のみだが、前面が比較的平坦な第0水門では石垣による集水桝をもち、その底面は石敷にし、第1水門では中心部は露岩のままだが、その周りのところでは敷石を敷設している。
- ・背面側は流水が少なく、水門は構築されていないが、どのような対応をしているのかは未調査のため不明である。ほとんどが地面へ自然吸収されるものと推定される。
- ・水門の背後の谷部上流は現況では池や湿地になっているが、第3水門と第5水門では土手状のものがあり、第5水門例では土手の強化、保護のため外面を石垣積みにし、その前面には敷石まで敷設している。また第3水門では土手状部の一部を開き、樋門的に石を並べ水量調節をしているらしいものもある。緊急時の飲料水確保はその全部を利用したのかどうか分からないが、こうしたところを利用するようである。
- ・他城のいくつかの水門は城門と隣接しているが、鬼ノ城では両者は離れており、最も近い第4水門と東門でも約50mほど離れている。隣接するものについては、城門への登城道の最終部分が谷筋で

あったことを窺わせていると考えられる。

鬼ノ城の水門については、高い位置に排水溝が設置されており、これが特徴だとされている。確かに他の古代山城の水門の排水溝は最下部に設置されており、やや高い位置にあり樋状に排水溝を城外へ突出させた御所ヶ谷城例は例外的なものといえる。

韓国の壤城山城¹⁵⁾の水口も石垣基底部から2mほど高い石垣中に設置されており、現象的にはよく似ている。

では鬼ノ城の水門の排水溝は例外的ともいえる高い位置に設置されているのは何故であろうか。このことについてはすでに河本 清氏が「多分に立地する地形からくる技法上の特徴であろう。」¹⁶⁾とし、「傾斜変換点にあたる位置で、その分岐点に構築していることからくるものであろう。」と論じている。他の古代山城例では、水門の入水口と排水口の比高差がほとんどないため、水門石垣の最下部に設置するのが工法的にも自然であり、合理的でもある。

鬼ノ城では調査された第2水門で見ると、水門部が傾斜変換点に構築されているため、地山面が背面側と外面側では2mほどの高低差がある。このため、石垣最下部に排水溝を設置すれば21度もの下降傾斜になり、工法的にも容易ではない。石垣最上部に設置されている排水溝の下降傾斜は図上で計測すると6度ほどの緩い傾斜になっている。ただ石垣最上段ということは土塁最下段であり、排水溝の両側方と天部は土塁に接しており、排水溝内からの漏水の懸念がないわけではない。しかし、水門背後の谷部の大きさや流量はさして多くないから、この位置に設置するのが最も合理的であり、工法上からも容易であったのだろう。

国内の他城で下部に排水溝をもつものについてみると、水門の背面側と外側の高低差はほとんどなく、それゆえに下部に排水溝を設置したものと考えられる。

朝鮮半島では、入水口から出水口まで城壁の中で階段状に低くなっているものが幾つか知られているが、日本ではそうした事例はない。こうしたことは排水口の傾斜角度がきつく、水流を弱めることを意図したものであろう。



第154図版 第3水門背面側



第155図版 第3水門背後の谷の施設

(3) 城門

城門は四か所に設けられている。正面側に三か所（東・南・西門）と背面側に一か所（北門）である。四門とも発掘調査し、残存状況が良好だったので規模構造の概要が把握できた。

・城門を構築しているあたりの城壁は、上屋の架構もあってか通常の城壁幅6～7mに比べてやや

広く、ほぼ10m前後である。

- ・城門の城壁外側は土塁であり、石塁（石垣）となるものはない。ただ、北門は城内側からみて右側の下半の2 mほどは石垣積みである。一方、城内壁は小石材を主体とした1 mほどの石積みである。
- ・城門は四門とも掘立柱城門で、柱に添わせた門礎をもつ。門礎には柱形の削り形、方立穴、軸摺穴、蹴放しが一体化して刻まれている。
- ・柱の削り形の形状から、本柱は東門のみが丸柱で、他の三門は角柱である。本柱以外の柱は本柱と同種だが、北門のみは本柱が角柱、他は丸柱という異質な組み合わせである。
また城門ではないが、角楼の6本の柱も角柱であり、角柱の多用さが目につく。
- ・方立穴の形状は東門のみは長方形で、他の城門はほぼ方形であり、軸摺穴は隅丸方形ないし方形である。
- ・蹴放しの刻みから、扉はすべて内開きとなる。
- ・門道部の床面は、花崗岩を主体とした石敷である。門礎と扉筋の石敷材は精緻な加工、研磨が施されており、西門例では扉の開閉のため石敷材の一石に弧状の調整痕さえ認められる。その他の石材は転石のまま使用している。

鬼ノ城で使用された石材のうち、門礎は最も加工が施された石材である。

- ・門道部の柱間壁面は、西門・東門・北門は板壁だが、南門は土壁の可能性がたかい。
- ・後柱から奥の門道部は、石垣積みである。東門と北門は扇状に開くが、西門と南門は直線状にのびるとともに、地山の傾斜があるため石段が設けられている。
- ・北門では門道部の中央に排水溝が設けられているが、他の三門では排水のための特別の装置はない。
- ・東・南・北門は門道部前面と床面との間に2 mほどの高低差がある。西門は右城外側には2.5mほどの高低差があるが、左側にはなく前面は土製のスロープになっており、この部分には敷石はない。ただ、復元整備工事に伴う敷石修復作業の状況からみると、どの程度の拡がりかは捕捉できなかったが、一部に敷石が存在した可能性もある。
- ・門道部奥の城内には、西門では目隠し塀があり、南門では尾根斜面が閉塞的な役割を果たしている。また東門では巨大な露岩が塞いでおり、北門では柵形状の空間が作られている。

これらは城門を突破されたときの備えであろう。一方、城外側をみると、南門の前面は堅堀状に穿たれており、西門でもやや浅いが同様の溝を穿つとともに城門の左右前面を少し突出させ、とくに右突出部の下半部は石垣積みになっている。また北門では谷頭部の左斜面側に低い3段3列の石垣を築いている。城門部を味方折れ、敵折れ状に配するとともに、さらなる防御性を高めているものと思われる。

- ・敷石は城門部の内外にも敷設されているが、南門では城壁上面一扉筋列にある土塁中の柱（板塀または柵列）と城内壁の間一にも敷石がある。西門ではそれに相当するものは流失著しく2石しか残存しないが、同様に敷設されていたとみられる。
- ・城門の上屋の有無を直接証明する資料としては、南門から10mほど離れたトレンチ調査で小瓦片が1片のみ出土している。他の城門では皆無である。南門の小瓦片をどう評価するか、という問題は残るものの、上屋を想定すれば基本的には瓦葺きとは考えられず、板葺きの可能性がたかい。
- ・城門の規模は、東門は間口1間（3.3m）奥行2間（5.6m）の6本柱建てである。北門も間口は1間（4.0m）だが、奥行は2間（6.38m）の可能性が高いようで、3間（9.38m）の可能性もないで

はないが、むしろ最後列の2本は下屋的な柱かもしれない。

- ・西門と南門は同大の間口3間(12.3m)奥行2間(8.2m)の12本柱で、中央の1間が通路部であり、外側の柱6本は土塁中に埋まる。
- ・4門とも掘立柱城門であるため根入りは深く、本柱での数値をみると西門では2.0~2.2m、南門で2.0mもある。東門では2.0m、北門は2.3mである。これらの数値をみると、根入りは各柱ともに2.0m前後の深さであり、柱の太さとともに上屋を考える資料を提供しているといえよう。
- ・南門と西門は、門道部がかなり埋まった段階で被災している。南門の柱の炭化材の樹種鑑定¹⁸⁾では門柱材は櫟である。

城門部は残存状況がよいため、床面石敷材を除去しての調査は行っていないが、調査時の所見からすれば建替え等は想定しにくいと考えている。

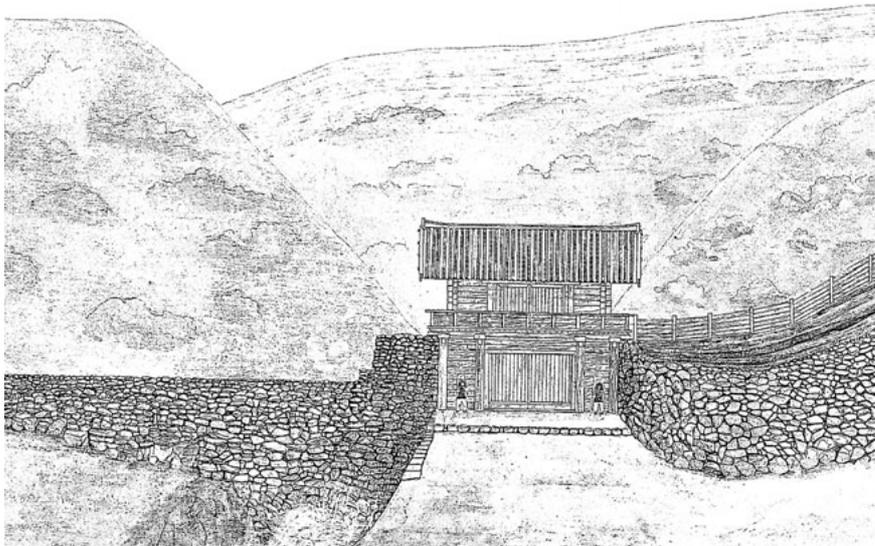
以上が鬼ノ城の城門4門の発掘調査で確認できた内容である。簡略に言えば、鬼ノ城の城門は4門とも掘立柱城門で、門道部床面は石敷、柱間は板壁か土壁、西門を除く3門は懸門ということになるか。ところで掘立柱城門ではあるが、本柱(親柱)には精緻に加工した石材が添わせてあり、これを「門礎」と称してきた。先学は「石製唐居敷」¹⁹⁾と称しているが、「唐居敷は扉口の柱足元にそわせて置いた盤状の厚板で、これに扉の下方の軸穴をほる。」もので、「ほとんど木造で、一枚の厚い盤状の材で作られるが、切石で作られることもある。」²⁰⁾という。鬼ノ城は掘立柱城門であるので、門礎と称してきたが、これとても通常にいうところの「礎石」と混同しやすい名称²¹⁾ではある。

それはさておき、この鬼ノ城の城門と他の古代山城の城門を比較しておきたい。

- ・城門両側の城壁は、鬼ノ城では基本的に土塁であるが、大野城大宰府口城門²²⁾では城内側からみて右側は水ノ手石塁が、左側も石塁となっている。また御所ヶ谷城中門や基肆城南門も同様に考えられる。一般的には城壁の一部を開口し城門を構築しているが、谷部に城門を構築した場合水門と一体的な構成となっている。これは言うまでもなく、城門の設置箇所²³⁾に起因したものであり、鬼ノ城のように城門が谷部を離れて構築した場合とは異なる。
- ・鬼ノ城は門礎を添わせた掘立柱城門であり、門礎・門礎石についてはすでに先学の論考²⁴⁾があり、また最近では城門構造の類型化作業を通じて暦年代を探る意欲的な論考²⁵⁾もある。各氏が指摘する弧状の刳り形をもつ丸柱使用の北部九州に対し、コの字状の刳り形をもつ角柱使用の瀬戸内沿岸部とは対比的であり、系譜的な連関を想定させるが、その回答は困難である。鬼ノ城では丸柱と他の3門の角柱使用という両タイプがあり、葛原克人氏は尺度論から角柱の西・南門が丸柱の東門に先行した可能性²⁶⁾を示唆している。
- ・門道部床面の石敷については、礎石建てだが金田城二ノ木戸、三ノ木戸、南門²⁷⁾がある。屋島城の門道部は流失著しく明確ではないが、石敷の可能性があるのでないかと筆者は考えている。また金田城南門の床面は15~25cmの4段の段差²⁸⁾があり、段数不明だが屋島城城門にもその可能性²⁹⁾があるようである。朝鮮半島では平壤城平壤神社前門址では、薄い板状の切石を丁寧に敷き並べているが、門道部を石敷とする城門例は少ない³⁰⁾。
- ・門道部の柱間間は鬼ノ城では板壁か土壁だが、大野城大宰府口城門、金田城二ノ木戸・三ノ木戸・南門、御所ヶ谷城東門・第二東門、讃岐城山城城門などは石積みである。車勇杰氏によると、朝鮮半島では開口部の側面の城壁はほかの所より大規模であり、堅固な壁体に築いたものが一般的で

ある、とのことである。

- ・鬼ノ城北門では城門の門道部に排水溝を設けているが、屋島城城門にもある。朝鮮半島では新羅系の城では一般的にみられるが、百済では床面全体から流すような形だそうである。
- ・城門前面と床面の間がどの程度の高低差があれば懸門とよんでよいのか判らないが、鬼ノ城ではおよそ2 m前後の高低差がある。この高さでは何らかの昇降装置がなければ進入はできない。屋島城城門の前面は流失著しく、現状では1 m程度の高さしかないが、旧状は鬼ノ城例に近いかそれ以上のものと推定されている。こうした懸門は車 勇 杰氏によると、新羅系の城によくみられる形式だとのことであるが、百済では未発見だそうである。
- ・城門の上屋については大野城大宰府口城門の第Ⅰ期および第Ⅱ期城門の復元案が示されている。上屋構造については古代山城の参考事例はなく、寺院、都城とも性格を異にするから、遺構の状況と後代の門を参考にするほかない。こうしたことから、今回の西門の復元はテストケースとして、またたき台としての役割をもつものとなろう。



第166図
大野城大宰府口城門
第Ⅰ期復元案
(註35書より)



第156図版 南門のスサ混入焼土



第157図版 西門扉開閉部の調整痕